

本の紹介と翻訳 『ベドゥークもしくはバルザックのお守り』

著者	川神 傅弘
雑誌名	仏語仏文学
巻	40
ページ	1-9
発行年	2014-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017233

本の紹介と翻訳

『ベドゥーク もしくは バルザックのお守り』



川神傳弘

本書は1925年マルセル・ブートゥロンの手になる豆本である。奥付に「Balzaciana のために」という記述が見えるので、バルザックの逸話として書かれたものであろう。

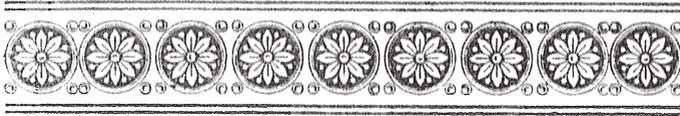
バルザックは手相、占い、占星術、予言など〈第二の視力〉たる魔術的洞察力に意を注いだ作家でもあった。『三人の巨匠 バルザック』¹⁾の項でシュテファン・ツヴァイクは次のように彼を評している。

そして、彼の内奥の本質に混ぜ合わされたこの魔術と言う種子、彼の芸術を単に生の化学にとどめず生の錬金術としたこの不可解という性質が、彼を彼の後継者、模倣者、なんづくゾラから引きはなし、優越させる。(…)バルザックが魔法の指輪を一廻しさえすれば、そこにはもう何千という窓に飾られた宮殿が築かれている。(…)最初のきっかけとなる感銘はつねに魔術的なものなのであって、労働によって得られたものではなく、生から借りてこられたものではなく、生からの豊かな贈与なのである。

このように、バルザックはスウェーデンボルクの神秘説の信奉者でもあり、オカルト的なものからエネルギーを得ていた時代があったようで、『ルイ・ランベール』『セラフィタ』などの作品にその趣を見ることができる。

一つおことわりしておかねばならないのは、何度読み返しても話者（主語）がどこで入れ替わったのか分からない書き方になっていることであ

る。バルザックが語っていたはずが、いつの間にやら別人物に変わっている。作品の性格上作者が故意にそうしたのか、もしくは急いで書き進めるうちにその配慮を怠ったとも考えられる。あるいは、訳者の未熟ゆえの読み違いの可能性もある。己が不明を恥じお詫び申し上げる次第である。



『異国の女への手紙』第一巻270ページに次のような文言が読み取れる。《また私はベドゥークによって、多くの人々や多くのものごとに打ち勝った!》(1835年8月11日)。それからもう少し先の289ページで、バルザックはハンスカ夫人²⁾に《ベドゥークは私にとって効き目のないお守りではありません》と再度ベドゥークについて明言している(1835年12月18日)。最後に1836年3月27日彼はさらに書き送る(312ページ)《ベドゥーク!— 私はなさねばならぬことを何も忘れない》。

ベドゥーク、それは妙に謎めいた暗号である! 『異国の女への手紙』の他のどのくだりにも、またバルザックの書簡や作品のどこにもそれは見当たらない。このおかしな響きをもつ二音節の謎が私の好奇心をそそり、お呪いのようなこの言葉をなにか分からぬままに百遍も繰り返し呟いたとき、突然ゴズラン³⁾の『スリッパ履きのバルザック』のユーモアに満ちたある章を読み返してみようという気になった。そこにはバルザックの有名なお守りの話がある。まさしくそのお守りである東方の印章は1835年6月、バルザックがオーストリアから持ち帰ったものである。私が先に引用した日付の数か月前のことだ。

一体どのような印章なのだろうか! 一個の不可思議なもの、非常に貴重なものであるから、仲間うちのことを思うバルザックはその貴重な品

から、自分ひとりだけが利益を得ようとは思わなかった。ものそのものの価値がすべて判明したその日、親友のローラン・ジャンに知らせようと彼の家まで駆けつけた。ローランは『シャリヴァリ』⁴⁾の鳴鐘家で、画家で作家でもあり、とてつもなく有名なラファルジュ夫人⁵⁾の婚約者になりそこねたことのある、要するに真面目な顔をしておかしなことをする、バルザックが呆れ果てながらも敬愛する人物だった。そこでバルザックはナヴァラン通りのローラン・ジャンの家へ駆けつけた。私が申し上げているその日というのはその夜の、それも夜半であったが、彼は力いっぱいベルを鳴らしてぶつくさこぼす門番を叩き起こし、ローラン・ジャンをも起こしてベッドから引き摺り出し、彼の腕をとって秘密めいた様子でランプの傍らに導いた。

しかし、そのあとのことはゴズランの語るその場面の様子を聞くことにしよう。

— この指輪を見たまえ！

— あゝ、見えているとも、4スーはするな。

— 黙りたまえ！もっとよく見てくれよ。

— 6スーほどか。もういいじゃないか、やめようこの話は。

— 聞いてくれ、とバルザックは続けた。この指輪はこの前のドイツ旅行の際、有名な歴史家のド・アメール氏がウィーンで僕にくれたものだ。

— それから？

— それから、ド・アメール氏はにっこり笑みを浮かべながら言った。《いつかあなたは、私が差し上げたこのささやかな贈り物の価値に気づくでしょう》。私はこの言葉の意味を考えぬまま指輪をはめた。そこらに数多あるエメラルドの石としか思わなかったのだ…。

— それで？

— それでだ…まずこの宝石にはアラビア文字が刻まれている…これらの文字は…。昨日私を待ち受けていた驚愕の大きさを先回りして言うのはやめよう。私は君とこの宝物を共有し、驚きを分かち合うために

駆け付けた…。つまり、昨日ナポリ大使の夜会で、この象嵌された文字の意味を、トルコの宮廷大使に訊ねてみようと思いついて…指輪を見せた…トルコ大使は一瞥するや、場に居合わせた人々がみな驚くような叫び声を発した。《あなたは予言者マホメットから伝わる指輪をお持ちだ》と彼は深々と身をこごめながら僕に言った。《これはマホメットがしていたもので、この文字はマホメットの名前です。およそ100年前ムガル帝国からイギリス人が奪い、その後ドイツの皇太子に売却されたものです…》僕はすぐさま彼の言葉をさえぎって言った…。《これはウィーンでド・アメール氏からもらったのです》。——《即刻ムガル帝国へ赴きなさい、とその大使は私に言った。ムガル帝国は、マホメットの指輪を持参した者に山のような黄金とダイヤモンドをくれたと言います。あなたも財宝を持って帰国することになります》。私の喜びがどのようなものであったか想像してくれ！そういうわけだ、ジャン、天にも昇る法悦とした気分で、ゴズランを交えわれわれみなでマホメットの指輪をムガル帝国に返しに行こうと思って君を迎えにきたというわけだ。行こう！莫大な財宝がわれわれを待っている。

— なんと、そのために君は夜の夜中に私を訪ねてきたのか。

そうだよ、ローラン・ジャン、そのためだ。やれやれ、私は永らく君の無分別に目をつむってきた。このことでは私も似たようなものだが。君たちが冷ややかなまなざしで見つめたこの奇妙な文字、私もそれがバルザックからの手紙の裏面の封蝋に押しあつたのを見た、しかもちょくちょくね。しかし、その優美なアラベスク文字に心を動かされることはなかった。まったくアラビア語を知らなかったからだ。このような無頓着がいつまでも続いていいはずはない。私は東洋学の権威に訊ねに出かけた。彼は仕事机の上に蝋の印判を押し当てた。それからルーペをとって綴りを書きとめ、



بدوح B d oû h

ベドゥー (Bedoûh) と発音した。私は飛び上がらんばかりに喜んだ。してみると私はバルザックのベドゥークを見つけたのだ。その学者はルーペを置くと驚きのまなざしで私を見て言った。

— なんともはや、この謎の言葉があなたを驚かせたようだが、これはイスラム諸国で普通に使われるものです。レノーという人が『ブラカ侯爵収蔵図書他のペルシャ・トルコに関するアラビア語記念碑的作品』という本の第二巻243ページで明らかにしているのですが、これは剣や兜、またホッセインという名の地方軍代官の小さい印璽にも彫り込まれている。イスラム教徒はあらゆる荷物や手紙が届かぬ危険から守るために、ごく普通にこの文字を書くのですが、ご存知ないかな？

— しかし、だからといって、この印章に刻まれたのが予言者マホメットの名前でないと言えるでしょうか？あるいはアラーの名前でないということがあるのでしょうか？と私は不安な気持ちで尋ねた。

— あゝ、彼は微笑みながら答えて言った。あなたはまだお人よしのド・アメール氏のたわ言を信じているのですね。あの御仁は1830年アジア・ジャーナルにおいて Bedouh (彼はこう記述していた) はアラーの名前の一つであり、それは《彼はしっかり歩いた》という意味だとも主張していた。さらに次のようなくだりを J. ド・アメールは書いている。第二シリーズ第五巻72ページです。《自然の、もしくは創造者の等速の歩みは、Bedouh という語を構成する四文字の数値でまことに巧妙なやり方で表されている》。b = 2、d = 4、oû = 6、h = 8 であることに気づいた後、アメール氏は《これは2、4、6、8の算術の均衡であり、べき指数は常に2であることを確認しました。》

頭脳明晰のド・アメール氏は夢想的な方でした。彼の言い分から一つだけ覚えておいてください。この呪文は2、4、6、8の数字を文字に表した数列なのです。イスラムではこれらの数字はお守りの力を持ちます。その上、蠟の刻印は、私の間違いでなければ恐らく18世紀の終わりに、ペルシャの優れた彫師によって刻まれたものです。

その高名な東洋学者は続ける。付け加えますと、2、4、6、8の数字は正方形の四隅に位置して九つの数字による魔法陣をなす四つの基本数字であり、どの方向に加算しても合計が15になるのです。Aboudjedという名の特殊アルファベット順にこれらを文字に直すと、その語彙はB d o û h'であり、あなたがたが非常に神秘的と思っておられる有名なベドゥークなのです。

4	9	2
3	5	7
8	1	6

イスラム人は wofk 、 djadwal 、 khâtam など、この魔法陣を表す言葉はいくつも持っています。この魔法陣の使用はイスラムでは少なくとも10世紀にさかのぼり、これはギリシャ人やヒンズー教徒も利用しています。

なんと！バルザックのお守りというのは、このようなものなのですか！私はこのガラクタの寄贈者ド・アメールを軽蔑しなければならない。とはいえ、ジョゼフ・ド・アメール＝ピュルグスタール氏は取るに足らぬ人間などではなかった。東洋学の学者であり、十八巻にのぼる『オスマン帝国史』の著者でもある彼は、ウィーン・アカデミー、パリ碑文アカデミー会員、シャンポリオンやルナンが所属した有名なアジア協会の会員であり、さらに50を超えるヨーロッパの学術団体に名を連ねていた。

1774年生まれの彼は、まずオーストリア政府が派遣した中近東諸国通詞兼外交官でした。数か国語を話す驚くべき才能の持ち主で、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、スペ

イン語、フランス語、ロシア語など10か国の言葉を話した。82年のとても長い生涯を歴史の研究に捧げました。

非常に敬虔なカトリック教徒であったド・アメール男爵は宮廷顧問でもあり、毎日律儀にお祈りしたのですが、彼はそれをアラビア語で唱えたのです。

ところで、ド・アメール氏はおかしな碩学、軽蔑すべき戯言を弄する人物、ようするに一言で言えば阿呆であります。まあよしとしよう、しかし私が認めがたいのは、大いにオカルト秘術にのめりこんだバルザックが、くだらない、とるに足らない一つの暗号にとつてもなく重要な価値を見たことである。そういうことではあるが、突然わたしは気づいた。懐疑的で侮蔑的な文献学者などではなく、本来のふさわしい場所、つまり魔術の本に真実を求めるべきではないかと。

かなり古い時代にイスラムで流行った、尊敬すべき作家であるエルブウニとソワイユティの名高い魔術論のあることを、やっと私は知った。私がひどく無関心であったため、それまで知らなかったのである。真実が私に与えられたのである。あゝ、やはりバルザックは慧眼の士であった。賢者らはこう言っている。ベドゥークはわれわれの祖先アダムから一直線に伝わる呪文であり、金の台に被せたルビーに呪文として刻まれたベドゥークを身につける者は必ず幸福になる。また、いかなる種類の効力をもつか。ベドゥークは人を盲目にする。ベドゥークは恋情をかき立てる。ベドゥークは不幸から身を守る。お望みとあらば、ベドゥークの不可思議な秘術のいくつかをお教え申そう。

難産の場合、火打石と櫛にその文言を記して、左足の下に石を、右足の下に櫛を結わえて待ちます…。

想いの届かぬ恋の場合、ナツメヤシのような食べ物あるいは、麝香のような香りのものを用意して、それに向かってベドゥーク、ベドゥーク、ベドゥーク、ベドゥークと4度唱える。その後で愛してほしい人に食べてもらうか、嗅いでもらう。そして待ちます。あるいはまた、正方形の紙にベドゥークと書き記し、それを白鳩の翼の下に置きます。つれない

お方の家まで走ってゆき、その鳩を放ちなさい…。そして待つのです。が、待つ時間はありません。なぜならあなたが惚れ込んだ美女は直ぐにもあなたの両腕に飛び込んでくることになるでしょうから。

心臓や肝臓の病、また脾臓の病気については、麝香と樟脳でお皿の上にベドゥークを描く、次に水を注いで洗い、その水薬を病人に飲ませる…。しかし、医師に敬意を払って私は止める。

ベドゥークの呪文はずいぶん古くから伝わる尊ぶべきものだから、あの優秀なド・アメール氏がアラーの名前の一つと思うたのも無理はない。現今のイスラム諸国において、細民はもはやその意味を正確には知らない。なかには商業が大いに栄えたヘジャズの古代の商人の名とみなしている者もいるし、鬼神や妖精また天使の名前であると考える人もあり、東洋のヴィーナスの畏怖すべき名と思っている人もいる。私は魔術師が教えてくれたベドゥークの特性のすべてをあなたに披露するのは、やりすぎではないかと懸念するものです。そのうえ、そうした特性のいくつかは、西欧的な礼節を侮辱するような公言し難いものなので、秘伝を授けられた人にもみ伝えられるべきものなのです。

ベドゥークは偉大な力を持つお守りです。ベドゥークは基本的にその名称を構成する魔法の文字から力を引き出します。

その暗号と、暗号のグラフィックな表示や標章、また文字群は否定しがたい力を隠しもっています。バルザックはそれを固く信じていました。『ルイ・ランベール』の冒頭で《これらの文字の組み合わせ、その形状や文字群が一語のなかで描く輪郭は、まさしくいかなる国においてもその暗号の伝達者である未知なる存在の祖形をなすもの》と語っています。

アラビアの魔術師にとって文字は全宇宙と関連しています。文学は彼らにとって宇宙の学問なのです。古代ローマ人にとってはリテラーエと称するものが、北方民族にとってはルーンという語彙が人間知識の総体を表していたのと同じことなのです。

この不思議な力をもつ名前を有するものは鬼神たちの長です。この名前の威力たるや途轍もないものでありますから、礼儀正しくこの名を使

用すれば、守護神たちはまず、われわれを守る呼び声に応じないわけにはゆかない。有名なイスラム教徒イブン・エル・ハジジ・トレムサーニは語っています。秘法を示してもらうために彼が洞窟へ呼びよせた鬼神たちは、彼に答えて言った。《それがわれわれに強制力をもつ名前でなかったら、われわれは君の呼びかけに応じることはなかったであろう》。

ジョゼフ・ド・アメールの印章に刻まれたベドゥークトという暗号がバルザックにどんなに超人的な力を与えたかがわかります。

バルザックは忘恩の徒ではありませんでした。彼は印章に手厚く報いるため、宮廷顧問のド・アメール・ピュルグスタル男爵に作品『骨董室』を献じたのです。



註

- 1) シュテファン・ツヴァイク、『三人の巨匠』ツヴァイク全集8、柴田翔訳、みすず書房。
- 2) ハンスカ夫人、1832年以降バルザックの生涯にわたり文通と恋愛の相手となったポーランド貴族の夫人。1850年結婚にこぎつけるが、バルザックはその直後に逝去。
- 3) Léon Gozlan, 1803-1866, 作家、劇作家としてコメディ『コップの中の嵐』や『スリッパ履きのバルザック』などを書いた。バルザックの秘書であった経験からバルザックの回想録を書いた。
- 4) 『シャリバリ』、1832年創刊の絵入り風刺新聞。
- 5) ラファルジュ夫人、1840年砒素による夫殺しの罪で重罪裁判にかけられたラファルジュ事件の被告。